

婦人問題研究

第八四回例会（一九七七・一一・二六）

全国女性史のつどいに参加して

河 音 久 子

初の全国女性史のつどいは、八月二十七・二十八日に名古屋で開かれました。私たち京都の婦人のあゆみ研究会事務局メンバーも、全国の女性史の動向に学び且つ先般まとめた「京都の婦人のあゆみ」の宣伝かたがたそのとりくみの報告もしようということに参加したわけです。二十四都道府県から約百六十人の参加者の層も学生から家庭の主婦・研究者・勤労婦人等々実に巾広い層からの参加があり、研究会として参加した人、個人として参加した人と参加の仕方さまざまなです。女性史研究の専門家、社会教育にかかわって女性史を学ぶ人々、婦人運動にかかわりながら女性史を学び、地域の婦人の歴史をほりおこそうとしている人々、等々女性史とのかかわり方や動機もさまざまな人たちが一堂に会したわけです。

その時の状況をここで報告して、女性史のあり方について今日お集りの方々にお話し合いたいと思うと口火したいと思います。その時の研究報告や討論については、最近報告集ができましたので、くわしくはそれを参考にしていただきたいと思います。

報告者と報告題目は次の如くです。

第 44 号

1978. 10

* 全国女性史のつどいに参加して

河 音 久 子

第一日午後

一、最近の女性史関係出版物の動向

神 谷 伸 子（大阪女性史研究会）

二、聞き書きの中の歴史

高 橋 三枝子（北海道女性史研究会）

三、名古屋市議会婦人請願二十二年のあゆみ

伊 藤 康 子（愛知女性史研究会）

四、近代日本の女子教育史をめぐって

中 島 邦（日本女子大）

第二日目午前中

一、兵庫県婦人運動史研究会のあゆみ

小 松 と き（兵庫県婦人運動史研究会）

二、京都の婦人のあゆみをまとめて

久 米 弘 子（京都婦人のあゆみ研究会）

三、地域の婦人運動を発展させるなかで

一 婦人の十年「広島県行動計画」の請願

北 西 英 子（広島女性史研究会）

四、女性史サークルのあゆみ

一 歴史を学び、つくり、記録して二十二年

工水戸 富士子（愛媛県松山女性史サークル）

第一日目の午後の報告は、「女性史の成果と方法を貧欲に学ぶ」

ことをめざして組まれたそうですが、第一の大阪の報告は一九七五年から一九七七年七月までの女性史出版図書、論文のリストとそれに対する論評です。女性史研究にとって基礎的なものとして参考になるものです。第二の北海道の高橋報告は、屯田兵の家族の歴史や、アイヌの女性の歴史等、今まで口をとざしていた人々、あるいは色々地方史ができてもとりあげられなかった、うずもれた女の歴史をひきだし、ほりおこしていった感動的な話でした。唯、あとの討論でも問題になったことですが、きき書きの方法論の問題、現代史の場合どうしてもきき書きが重要な資料となるわけですが、それをどう科学として高めていくか、史料批判ともいべき作業をどのように行っていくかは、各々各地でほりおこしともいべき仕事をすすめているものにとって共通の課題であり、試金石ともいえる課題でしょう。

第三の愛知の伊藤報告は、「戦後愛知女性史年表」をまとめる作業の一つで、婦人と政治とのかかわりを二十二年間の市議会への婦人の請願を例にとって分析をした報告です。請願の分析から当時のその地域の婦人のねがい、運動を分析するという地域女性史の研究方法の具体例ともいえる報告でした。第四の中島報告は、女子教育研究者としての長年の研究業績の中から、近代日本の女子教育の歴史の整理、又女子教育に関する研究業績の整理をしていただいたことも、今後研究をすすめるにあたっては参考になることだと思いましたが。

二日目の四つの報告は、「組織の発展のため」に組まれたところですが、くしくも、地域の婦人運動とかかわって、その地域の婦人運動をほりおこしまとめるという点でよく似た内容でした。京都

からも「京都の婦人のあゆみ」をまとめたその経過と教訓を報告いたしました。たしました。兵庫からもらいてう展の継続展として婦人運動史研究会が作られ、婦人運動にたずさわった人々を中心に毎月一回例会をもち、きき書き、資料あつめ、その報告、情報交換をやり、その成果を機関誌「登音」に結集するという持続的な活動が報告されました。又、広島からは、らいてう展、国際婦人年等の婦人運動と連携し、職場、地域の諸問題と女性史の研究と結びつける活動の報告その一つとして、婦人の地位向上のための「国内行動計画」に平和の問題が欠落していることに対して、被爆地広島の人々として見逃すわけにはいかないと、県に対して「県内行動計画」の要望、請願行動を行った報告がありました。又、二十二年のあゆみをもつ愛媛からは、お互いに女性史の学習をやりながら、その成果を例えば、母親大会で構成劇「女性のあゆみ」を立案、出演するなど、地域の婦人運動としっかり結合しながら成長していった経験が報告されました。とりわけ「お互いに階層・思想・職業・年令のさまざまなねがいをみとめ、尊重しあいながら、無理のない運営をやってきた」と、地域の運動に役立つ、地域社会の記録者になる等、女性史サークルとしての性格を通じて、地域社会の構成員としての任務を果たしていく姿勢をつらぬいてきたこと」等がまとめの基本としてのべられました。このことがこのサークルが二十二年もの間息ながく続けることができた秘密であろうと感じました。

二日目午後「地域の女性史を発展させるために——私たちはどういう女性史をめざすか——」の討論に入ったわけですが、全国からいろいろな方が、たくさん集って始めて話しあったということ。仲々まとまりはみられません。先ず北海道から「貧困の中で一生県命

働き、黙って埋もれていった九十九%の女性の足跡をほりおこしたい」「今迄の通史を根底からひっくりかえすような形で、書かれなかった部分」を女性史としてまとめたい。「何故今までの男性文化、男性史の中で残された資料で年表づくりをやるのか」という問題提起があり、「女性史と年表」といった私どもにとっては意外？なところから討論に入りました。「京都の婦人のあゆみ」も年表が中心的な作業ではあったわけですが、思想・信条のちがう多くの団体が共通の財産としうるもの、そういう意味で先ず一番基礎的な年表の作成を手がけたわけで、年表がすべてだなど毛頭考えていないわけです。各々の団体がその年表を基にして、各団体の歴史、各個人の歴史をより具体的に、生き生きと描いてほしい。そのために出典も明記しながら、新聞・各団体からのアンケートにいたるあらゆるものを素材に年表作成をまずやったというところです。ききがきをし、埋もれているものを歴史の中に具体的に、生き生きとよみがえらせる。それは共通の課題といえるでしょう。そのためにも年表が必要だというのが私たちの立場でした。私たちの不十分のきき書きの中でも年表は強力な武益となってくれました。年表をみながらみんなで話し合うと、忘れていたことも思い出し、記憶の中のまちがいをただすこともできました。具体的な生き生きとしたきき書きも、歴史の中に正しく位ちづけないと、それ自体いくら感動的でも、あるいはそれをどれだけつみ重ねても歴史にはならないのではないか。女性史の方法はもっときたえられねばならないと思いました。女性の歴史は欠落している部分が殆んどなので、ほりおこせば女性史になるといったところがあって、極論すれば、今は女性に関することをやればどんなやり方でも女性史になるといったらいすぎでしょ

うか。女性史の方法が整理されていない、確立されていないからでしょう。前近代についても討論の中で少しは出されましたが、全体として女性史の研究方法についてもっと論議を深める必要があるのではないでしょうか。

今回の全国集会で非常に有意義だったことは、全国各地に、色んなところで女性史を学ぶグループがあり、その地域の婦人運動とかかわりをもちながら、持続的に仕事すすめられているということを知り、その交流ができたことです。お互いの成果を確かめあい、学びあう中で、自分の地域のおかれている位置がより適確に自覚されるでしょうし、各々の地域のほりおこされたものを総合して全体の歴史もかきかえられていくであろうことを確信したからです。

討 論

「京都の婦人のあゆみ」を編集された、河音久子、久米弘子、井上としの三氏が、名古屋で開かれた「全国女性史のつどい」に参加された。そのお話をうかがおうということで、三氏を迎えたので、討論は当然、「あゆみ」をめぐる女性史のあり方にしぼられた。とりわけ、「女性史のつどい」では、「きき書」か「年表」かという討論になったということで、その是非についての意見に集中した。科学としての基礎作業として、年表がいるのは当然で、それを否定するのは問題外である。

しかし、こういう論争になったのは、年表にもりこめぬいきたいことのあることの表現ではないか。新聞はあてにならぬ、いわなくてはならぬという危機感が、きき書に向わせるのだ。生の声もあり

こまれなくてはならぬ。また、資料がないところでは当然きき書きが重要だ。しかしきき書きには、史料がなければならぬ。安直に、きいて文章化するのではない。また、きき書きをする人と、される人との対立を招くのではないか。それをつきつめれば、される人が歴史をかく以外にないことになり、いじめられる人がいないと歴史がかけぬことになる、それはどうか、というような意見がでた。京都でも、「あゆみ」に肉づけするものがほしい。婦人運動参加の人だけでなく、全婦人のくらしの歴史がほしいという意見も多くでて、「あゆみ」の研究会が、再開されるよう、みんなでバックアップしようということで散会した。「あゆみ」研究会の再開・発展を祈ってやまない。

(協田 記)

⑨ この号、大変発行がおくれましたことを、おわびします。

(美)